第３回　千鳥ヶ淵の環境再生に関する勉強会　議事要旨

日時：平成２３年５月１３日（金）１４：３０～１６：５０
場所：環境省皇居外苑管理事務所会議室
要旨：

- 本会は、当初 3 月 25 日に開催が予定されていたが、震災の影響により開催が延期されていたところ、改めて日程調整を行い開催された。
- 節電のため、クールビズスタイルで、空調や照明を落としての会議となった。
- 皇居外苑管理事務所長挨拶、異動に伴う新任者自己紹介含む出席者紹介、配布資料の確認の後、下記の説明や意見交換等がなされた。
- テーマは、水質と利用・環境教育、及び勉強会としての議論の取りまとめであった。
- 東京大学西村先生は、他会議のため途中から参加された。また、資料説明等に時間を要したため、会議時間が 20 分延長となった。

１.勉強会開催の趣旨説明と進め方・前回の議論について

- 資料-１、資料２-１、２-２に従い事務局より説明。

２.議事（敬称略）

（１）千鳥ヶ淵の水質改善について

（事務局からの資料説明）

- 資料３-１「千鳥ヶ淵周辺の水質、その他について」、資料３-２「千鳥ヶ淵周辺の水質その他に関する論点について」説明。
- 水質改善については、基本的には皇居外苑濠管理方針に沿って、今後別の場にて対策が講じられるが、千鳥ヶ淵固有の課題への対応のあり方についてはこの場で取り扱うことを確認した。続いて、質疑応答、議論を交わした。

<u>①「干し上げ」に関し、「牛ヶ淵」と「千鳥ヶ淵」の環境比較について</u>

（淺枝）干し上げは水質改善の手法として有効な手法であると思うが、千鳥ヶ淵での実施は可能か？

（飛島）可能性の確認はこれからだが、完全な「干し上げ」ができなくても、水位低下による水質改善効果は期待できる。

（傍聴者）：千鳥ヶ淵で「干し上げ」をする場合、千鳥ヶ淵で配慮すべき生態系はどんなものなのか、また千鳥ヶ淵の生態系はどの程度把握されているのか？

（飛島）千鳥ヶ淵では、魚類や植物等の生息状況把握がされているが、生態系は今の牛ヶ淵と比較すると水質が悪いため豊かとはいえず、エビモの再生実験をした時は、コイ捕食により定着しなかった。千鳥ヶ淵では、牛ヶ淵程神経質にならなくてよいと思う、ただ、一般論として、干し上げは生態系への影響が大きく考慮が必要。

（淺枝）干し上げ以前の牛ヶ淵と、現在の千鳥ヶ淵の状態を比較したい。それによって千鳥ヶ淵での干し上げ効果が推測できる。

山口（環境省）：牛ヶ淵の１回目の掻い掘り（水は干上がらない）では、外来魚のみ除去し、在来魚は戻した。２度目の干し上げの際には、コイはヘドロの中にもぐりこんでしまい生息数は把握できなかったが、捕獲されたソウギョは下流の濠に放した。
（淺枝）１回目の牛ヶ淵掻い掘り後、ツツイトモが大繁殖した時、コイは生息していたと思う。しかし千鳥ヶ淵ほどコイが多いと沈水植物復活が難しくなる。
（関）前回勉強会で高村先生も話されたように、最も重要なのは目標設定と合意形成。目指す生態系の姿（＝ゴール）を決めた上で、重視する種など具体的な手法を決め、アダプティブマネージメントしていく。目指すのは環境再生か、都会の親水空間（＝アメニティ）なのかをまず決めるべき。アメニティが目標ならば、コイがいてもいい。自然再生が目標ならば、過去の目指す時代に生息した生き物を把握し、その生物を濠に再生させることが可能かどうかを検討することになる。
（飛島）検討会で目標設定を行う際に合意形成する。しかし今までの議論から自然の再生を無視しアメニティ機能を高めることはない。水質維持のため沈水植物は重要視し、水質や生態系への負荷が大きいコイは、管理方針を決めた段階で見つかり次第、日比谷濠に集めて上流の濠からは取り除いていく。
（淺枝）ソウギョ放流以前の外苑濠は、水草が濠に沢山生育していたとする新聞記事があったはずだ。
（飛島）昭和３０年にソウギョを放流したので、それ以前は水草もあった。文献では沈水植物があった。
（常富）平成１３年の１回目の牛ヶ淵干し上げ直後から２年半ほど皇居外苑事務所に着任した。昭和３０年代の新聞記事に、清水濠の水草刈り取りについて記事があり、その後ソウギョが放流された。また、昭和４０年以後水草が無くなると同時に水質が悪化した記事が、昭和４５年くらいにあった。掻い掘り以前の牛ヶ淵と現在の千鳥ヶ淵の環境はほとんど変わらない。牛ヶ淵では、１回目の掻い掘りのときに、当時生息していたオオクチバス、ブルーギルの他に、大型のソウギョ、コイも外に出したと記憶。掻い掘り後、ヒシが大繁殖して濠を埋め尽くし水質はきれいで、降雨後だけ最上流部の水質が悪化した。

（２）千鳥ヶ淵の利用と環境教育について
（事務局からの資料説明）
- 資料４−１「千鳥ヶ淵周辺の利用の現況と課題」、資料４−２「千鳥ヶ淵における環境教育の現況及び可能性について」を説明。
- 環境教育については北の丸公園・濠における事例紹介を事務局及び関連団体から行った。
- 最後に、千鳥ヶ淵における利用と環境教育に関する論点を確認し、質疑応答、議論を交わした。

<u>①日本の表玄関にふさわしい情報発信を</u>
（淺枝）資料４−３について、利用動向調査で外国人や地方からこられた方への聞き取りはしたか？
（福田）外国人向け聞き取りなどはしなかったが、一般利用者対象アンケート調査の中で、この周辺の地理を把握していない方などから、北の丸公園から最寄り施設へのアクセス等に関する情報発信の充実や、案内板等への外国語対応に関する要望が出された。
（淺枝）ニューヨークのセントラルパークと同じで、ここは日本の表玄関の中心。外国人や地方出身者向けの情報発信ももっと積極的に検討すべき。
（飛島）以前、目標の議論で、千鳥ヶ淵の水もある程度改善されれば、少し以前まで郊外にふつうにあったため池のようなを取り戻し、大都市の水辺空間としての活用を考えたいという議論があり、東京駅から車で１０分以内の場所に創出できれば、誰にとっても大きな魅力になる。

②東京の都心に環境教育の拠点を作ることの意義

（関）利用に関しては同意見。一方、環境教育を研究している日本環境教育学会では「体験する→知識を得る→自然環境保全の行動をする」人材育成を環境教育の目的としている。自然環境保全の行動ができる場の設定については検討が必要。（今回の震災を通じて都市生活の危うさを知った）都市住民にとって、生態系サービスに依存し都市の快適性を享受してきた生活のあり方を見直すきっかけとする為にも、都心の環境教育フィールドは意義あるもの。しかしその使い方には合意形成が必要。

ドイツの環境都市は有名。そこでは夜になれば街は暗く自動販売機は無い。ドイツの若者が日本に来ると、日本は楽しいがドイツに同じ街はつくりたくないと言う。ドイツは環境教育の先進地だから、環境教育の成果として、国民は必要以上の便利さより環境保全を選択している。

（山口（千代田区））資料４－３論点のうち、今後の利用可能性の部分で「水辺とのふれあい」「周回する歩道の活用」はどんなことをイメージしているのか？

（飛島）合意形成が前提だが、水質改善された際に、自然観察と絡めた水辺空間としての活用は可能。周回歩道も、濠にそって一周を歩ける外苑濠は千鳥ヶ淵のみであり、ハイキング的な利用の場としておもしろい。

③環境教育にも役立つ観光協会の環境への取り組み

（岡田（観光協会））資料４-２で環境教育の関連主体に千代田区観光協会も出てきたが、観光協会では環境と観光の共生をテーマに、ボート場屋根に太陽光パネルを整備し一年間作った電気を毎年の桜まつりのＬＥＤランプを使用したライトアップ（１０日間＋２日間）に使用している。環境教育にも役立つ。

④東京のサクラの特徴と多様なサクラを知るツアーのすすめ

（西村）千代田区観光協会はサクラマップを作成している。先日、NPO 法人神田学会の活動で、サクラの専門家を呼んで東京のサクラについて話を伺ったが、江戸時代に各地の名物桜が集められ、東京は日本の中でもサクラの種類が多い場所ということだ。多様な桜を見られることが東京の特色だとしたら、千鳥ヶ淵はサクラの名所なのだから、違う形でのサクラの強調も考えられるのではないか。サクラマップは一度共有したらいい。サクラは自然のものであると同時に歴史的遺産ということができる。ソメイヨシノにこだわらず、周辺地域にあるいろいろな多様なサクラとあわせて鑑賞すると面白い。

（岡田）サクラにはいろいろな種類があるとは言っても、大抵の花見客は千鳥ヶ淵に集まってしまう傾向にあり、なかなか他のエリアにまで足を延ばしてくれる人は少ない。

（西村）神田学会では昨年までサクラ開花期間中に SAKURA ウォーキングツアーを開催してきた。観光協会も、是非勉強してツアーづくりの参考にしていただけたらと思う。

（３）千鳥ヶ淵の環境再生に関する論点について

（事務局からの説明と質疑応答）

・今後の千鳥ヶ淵再生プラン策定に向けての、スケジュール（資料６）ととりまとめのひな形（資料 5）を説明。

・今年度とりまとめる論点は、それぞれの参画者からの意見としてまとめ、プラン策定の際の合意形成に結び付けたい。水質と利用・環境教育は今日の議論のあとで、事務局で論点整理し、メインテーブル参画者に内容確認いただき、勉強会のアウトプットとして確定していく。傍聴者からも意見をいただけ

れば案作りに反映する。今後はプラン作成の検討会を今年度中盤から立ち上げ、再生プランを策定する。プラン策定以後は各参画者がそれぞれの持ち場で取り組むことになる。検討では、情報提供と意見収集、意思決定が必要だ。

①┌再生指標の設定の考え方について

（平（エフエム東京））環境再生については国民の心の利益につながるゴール設定が必要。時代性、生物多様性保全などのハードルはあるが、サクラとホタルは分かりやすい再生指標。大震災のあと東北を取材した際、荒廃した風景の中にサクラだけが点々と咲いているのが目に付いた。それを見た人々もエネルギーを感じるはず。ホタルは、三菱地所社史に、明治 41 年ホタル狩りを楽しむという 1 行がある。再生で目指す時代設定や、外部からの持ち込み問題もあるが、現在いるホタルの保護も必要で、そういうことを含めてプラン策定に期待したい。

（関）千鳥ヶ淵の環境再生は場所もテーマも注目を浴びる。これからは生態系サービスの価値の認識が進み、急激に内部化されていく時代。皇居外苑の生態系サービスもクローズアップされ、受益者（東京都民、日本人）はそれにお金（税金）を払う時代になる。企業 CSR も人権等から生物多様性戦略・CO_2 削減へのシフトが進んでいる。都会の中の緑の質の評価も、アメニティから生物多様性の保全にシフトし、それぞれの主体が緑の質を高めながら生き物のハビタットを形成しようとしている。千代田区でも生物多様性地域戦略策定にむけて動き出しており、外苑のもつポテンシャルが内部経済化されてシビアに発信できる時代になった。そのような意味でこのテーマとこれからの検討会に期待したい。

（大畠（千代田区））我々は自然を壊し利便性を追求してきたが、今回大震災があって電気の使い方含め、ライフスタイルそのものをどう変えていくのかが大きなテーマになってくる。いままでと異なり生物多様性や生態系を意識した上での目標設定が必要。今回の意識改革の必要性を踏まえて議論したい。

②幅広い対象者を対象とした情報発信と意見聴取による合意形成を

（西村）非常に都民、国民の関心が高いテーマ。広く全国民、区民、ローカル対象に意見聴取する仕組みを作るといい。広域・国民向けには、HP 上に交流サイトを作り、事務局から情報を投げかけて関心のある人が返信できる仕組みで誰でも自由に意見を寄せられるようにする。区民・ローカル対応として、千鳥ヶ淵には住宅が面しており、千鳥ヶ淵は住民にとっては庭先のようなもの。町内会や回覧板、管理組合等、なんらかの接点を利用して住民の意見を聞いたり、協力を得るとよい。情報発信を充分にはかるべき。

（浅枝）日本全国だけでなく、海外の方の意見も聞くべき。この地域（皇居および皇居外苑）は海外からの観光客も多い地域。今後日本に多くの観光客がみえた時、もっと国際的な視点で管理や案内を検討すべき。

以上